

『けなげなメイドのしつけ方♥』

著:森本あき

ill:樹 要

「ごはんぐらい、一緒に食べてくれたっていいじゃん！ 何で!? 何で、俺のことそんなに避けるの!？」

一瞬だけ、啓史が苦しそうとも寂しそうともつかない表情になった。え？ と思って見返すと、いつもの啓史に戻っている。

「じゃあ、南は何で俺と一緒にメシ食いたいんだ？ 別に一緒にじゃなくてもいいだろ」

切り返されて、南はうっと詰まった。

「俺の不規則な時間帯に合わせる必要なんてないし、それぞれが好きな時間に食べた方が、おたがい気を遣わなくてすむだろう？ 俺が言ってるのは、そういうこと。南を避けてる、とかじゃないから」

「だったら一緒にいい！」

南は叫んだ。

「俺は一緒にいいの！ 啓史と食べたいの！ 何で？ そんなにおかしなこと!? 俺は啓史のこと大好きだし、ソクケーしてるし、だから、ごはんのときぐらいは一緒にいて話したいって思う俺の方が間違ってるの!？」

「いや、間違ってるとか合ってるじゃなくて…」

「俺、絶対作るからっ！」

南は挑(いど)むように啓史をにらんだ。

「啓史が食べようと食べまいと、今日から一週間、二人分のごはん作るから！ 啓史が食べないなら捨てるからねっ！」

「おまえ…そういうのは脅(きょう)迫(はく)っていうんじゃあ…」

あきれたような顔の啓史に、南は大きくなずいた。

「脅迫してんのっ！ 食えろっ！ 俺と一緒にごはん食えろっ！」

呆(ぼう)然(ぜん)と南を見つめたあと、啓史はぷっと吹き出した。啓史が笑う顔を見たのは、本当に久しぶりで。ああ、こうやって笑う人だったんだなあ、としみじみとする。またこぼれそうになった涙を南はどうにか飲み込んだ。しばらく笑い続けると、啓史は笑顔のまま南を見る。

「いや、何かまあ、子供んときの南を思い出したよ。わがままの言い方、変わってねえなあ」

「じゃあ、一緒に食べる!？」

勢い込んで聞いたら、啓史は、うーん、と腕を組んだ。

「おまえ、食ってるとき、うるさいぐらい話しかけるだろ？ 俺、いま疲れてんだよな」

昔のような雰囲気、南の心が弾(はず)んでくる。南はぶんぶんと首を横に振った。

「気をつけるから！ ちょっとにする！」

「やっぱり話しかけんのかよ」

啓史は苦笑している。

「それに、南の出した条件に負けた形ってのも釈(しゃく)然(ぜん)としないし」

「じゃあ、啓史も条件出していいよ！ 俺、何でも聞くから！」

「何でも？」

啓史の目が、きらりと光った気がした。何かおかしなことでも言ったのだろうか、と南は不思議に思う。

「いま、何でもって言ったな？」

「あ…うん」

いくら考えても、その言葉の何が悪いのか分からない。だから、南はあいまいにうなずいた。

「…それじゃダメ？」

「いや、かなりいい」

啓史はにやりと笑った。

「何でもねえ。何にしよっかな。どういう条件にしたら一番いいんだろ」

啓史は一人で楽しそうに考え込んでいる。南は何となく怖くなって、後ずさった。啓史が、パチン、と指を鳴らす。

「俺の命令に絶対逆らわない、ってのはどうだ？」

命令？ 逆らう？ 何それ!?

「いやなら受けなくてもいいけど？ そしたら、俺も南とは一緒にメシ食わねえ」

ああ、そうか、と南は思った。

そういうことか。こういう条件を出せば、南が、じゃあ、一緒に食べなくていいよ！ と言うと、啓史は思っているのだ。

そんなに一緒に食べたくないのかなあ、と悲しくなったのは一瞬だけ。

ぜーったいに一緒に食べてやるっ！ という意地っ張りの自分が、圧倒的大差で勝利した。どうせ命令なんていっても、パシられるぐらいだろう。春うららかな、いい気候の中を買い物に行くぐらい何でもない。

「いいよ！」

南はちゃんと聞こえるように、はっきりと大声で発音した。にやにやと南を見ていた啓史は、驚いた顔になる。

「…は？」

「いいよ、って言ったの！ いいよ、命令すれば？ 逆らわなきゃいいんでしょ？ 逆らわなきゃ、一緒にごはん食べてくれんでしょ!？」

南の声が、だんだん大きくなる。

「その代わりに、昔みたいにちゃんとしゃべってもらうからね！ ぶすつとして会話なし、なんてのは許さないからっ！」

「…いや、まあ、そりゃいいけどさあ」

啓史は天を仰(あお)いだ。

「何で、こうやすやすと、受けちゃったりするかねえ。南、いままでよく誘(ゆう)拐(かい)されずにすんできたな。人を疑う、っていうのも、立派な人間の能力の一つなんだぞ？」

「何で、啓史を疑わなきゃなんないんだよっ！」

「そのセリフ、よーく覚えとけ」

啓史は、南の鼻を指でピンと弾いた。痛い！ と南は抗議する。

「あんときちゃんと考えて答えりゃよかった、って思うようになるからな、きつと」

「ならないっ！」

「ならなきゃ、その方がいいけどな」

最後の言葉はぼそつと言われたので、はっきりとした言葉にはならなかった。何となく自嘲ぎみのその調子に、南は首をかしげる。啓史は、またもとの様子に戻ると、にやりと笑った。

「じゃあ、いまからさっそくやってもらおう」

「いいよ。何？ 何か買いに行く？」

てっきりパシリだと思ってそう聞いた南に、啓史は、ふーん、とうなずいた。

「やっぱね」

「何が、やっぱね、なんだよ」

南はむっとして啓史を見た。啓史はしきりにうなずいている。

「そんなことしかやらされないと思ってるから、簡単に受けたんだろうな、って思ってさ。こりゃ、降参するのも早そうだな。世の中はな、南が思っているよりもっと複雑で、もっと意地悪なものなんだよ。ちょっと待ってろ」

啓史はリビングを出た。階段を上っている音がするので、自分の部屋に戻るのだろう。一階はリビングとキッチンとダイニング、そして、トイレ、洗面所、バスルームと生活空間になっていて、二階には四部屋ある。そのうち一番大きな部屋が両親の寝室、その隣が啓史の部屋、啓史の部屋の前が南、そして空いている一部屋は客室になっている。

しばらくすると、啓史が降りてきた。手に何かを持っている。

「これ着て、メシ出して」

手渡されて、南は首をかしげた。買ったばかりなのだろうか。透明な袋に入っているそれは、ただの真っ黒な服にしか思えない。これがどうしたと言うのだろう。

「部屋で着替えて降りてきな。降りてこなかったり、着替えられなかったら、そこでこのゲームは終了だからな」

啓史はにやりと笑った。

「ちっとは楽しませてくれよ」

わけも分からないまま、あいまいにうなずいて。南はそれを持って自分の部屋へ向かう。

「ぎゃーっ！」

南の叫び声が家中に響いたのは、それからすぐのことだった。

本文 p52～58 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>